

保護者および保育者が語る離島の幼児教育・保育施設の役割：鹿児島県三島村硫黄島の子育て広場つばき園を事例に

著者	得居 千照
雑誌名	地域と教育：筑波大学博士課程人間総合科学研究科学学校教育学専攻「社会科教育学演習Ⅰ」調査報告
巻	18
ページ	1-18
発行年	2019-09-25
URL	http://doi.org/10.15068/00157701

保護者および保育者が語る離島の幼児教育・保育施設の役割

—鹿児島県三島村硫黄島の子育て広場つばき園を事例に—

得居 千照

I. はじめに

核家族化や就業形態の変化、共働きの夫婦増加など、社会の変化とともに子育てを巡る現状は変化している。都市部では、保育所に入所したくてもできない待機児童の数が多く、その解決が目指されている。

このような社会的背景から、幼児教育・保育施設利用者のニーズや施設へのアクセス性、施設のサービス内容を分析し、就労と子育ての両立しやすい幼児教育・保育施設について考察した研究に黒田ほか（2015）がある。黒田ほか（2015）は、大阪市の3区（中央区、平野区、旭区）の保育園に子どもを通わせている母親を対象に、アンケート調査を行っている。アンケートでは、子どもの年齢や母親の年齢、就労状況などの回答者の属性や入園検討時期と待機児童経験について、また、毎日の子育て意識と子どもの将来像などが質問項目として挙げられている。黒田ほか（2015）のアンケート調査の分析では、①幼児教育・保育施設の入園を検討する時期は、妊娠中や出産後が多く、出産後の早い時期から入園させたいニーズがあること、②就労状況を問わず、知識育成よりも人格育成を重視する母親が多かったこと、③幼児教育・保育施設の選定には、立地が重視されていることが明らかとなっている。その上で、「就労と子育てを両立しやすい環境の構築には、施設の数やサービス面からの対応に加え、就業環境や社会環境の面からも対策が必要」（p.92）としている。

このように、保護者からみた幼児教育・保育施設に関する研究が進められているが、それらは都市部における事例を取り上げていることが多い。しかし、子どもが生きているのは都市部だけではない。へき地保育所や農村部、離島においても子どもが保育を受ける権利は守られるべきであり、幼児教育・保育の現状を捉える必要がある。

宮里（1999）は、「過疎地域の保育問題はほとんど研究されていない」（p.208）としたうえで、過疎地域の保育研究の「中心的な問題は、子どもが減っても保育園を維持していくことであり、そのためにどんな方法があるのか探ることが研究であることは

間違いない」(p.209)とし、今後の過疎地域の保育研究の方向性として、次の4点を挙げている。①行財政中心の保育研究から、保育実践を含めた総合的な研究が求められる。大規模園でのクラス別保育を前提とした保育実践理論を見直し、各地で展開されている小規模異年齢保育の実践の成果を集約すること。②保育所の適正規模論。都市を前提とした60人を保育所の最低規模とし例外的に30人まで認めている規模論を再検討すること。③小規模保育所やへき地の制度的検討、また、④国や県の特別助成制度などの検討である。

以上の宮里(1999)の研究からも、過疎地域はもとより、離島における幼児教育・保育施設にかんする研究は手薄な状況にある。しかし、このような状況の中でも、宮前ほか(1978)および鈴木ほか(1978)は、鹿児島県奄美大島名瀬市を対象に幼児教育の実態を調査した研究としてあげることができる。

宮前ほか(1978)は、5つの項目を立て、名瀬市内の幼稚園に子どもを通わせている母親151人および幼稚園の教師31人にアンケート調査を実施している。①家庭環境、②テレビ・おけいごとに対する意見、③学習と遊びに対する意見、④幼稚園教育に対する意見、⑤母親と教師の役割にかんする意見の5項目である。鈴木ほか(1978)は、宮前ほか(1978)の調査をもとに、横浜市における幼児教育の実態との比較を行い、テレビやおけいごと、幼児教育における母親と教師の役割、学習と遊びに対する意見などの地域差を母親と教師の両者の視点から明らかにしている。

また、得居(2018)は、新潟県粟島浦村粟島にある粟島浦村保育園へのフィールドワークを通して、保育内容の実態や保小連携プログラムの実態を明らかにしており、離島の幼児教育・保育施設を扱った数少ない研究の一つとして挙げられる。

以上の先行研究からも、離島には、離島ならではの幼児教育や保育施設の実態があることがわかる。得居(2018)は近年の研究であるが、宮前ほか(1978)および鈴木ほか(1978)の調査が行われたのは、1978年のことである。1997年に全国私立保育園連盟が第1回全国過疎地保育サミットされるなど、過疎地域における保育を巡る取り組みや現状は変化していることがうかがえる。また、当時の名瀬市の人口は約4万6千だったことから、さらに規模の小さい離島で調査を行うことで、都市部や大規模園での研究では明らかにすることのできない、幼児教育・保育施設の実態や課題を明らかにすることにつながると考えられる。

以上を踏まえ本研究の目的を、保護者および保育者への聞き取り調査を通して、離島における幼児教育・保育施設の役割を明らかにすることとする。本研究が対象とするのは、鹿児島県三島村硫黄島の子育て広場つばき園である。つばき園は、2014年5月に開園した村営の子育て広場である。つばき園は子育て広場でありながら、幼児保育だけでなく小学校へ進学することを念頭に教育的な支援も行われているため、本稿では幼児教育と幼児保育を行う施設としての意味をもたせるために「幼児教育・保育

施設」と表記する。

本稿では以下の手順により検討を進める。第一に、過疎地域における幼児教育・保育施設にかんしてどのような研究が行われているのか、先行研究の概観により明らかにする（第Ⅱ章）。第二に、本稿が対象とする三島村硫黄島「つばき園」の概要を三島村が発行している「広報みしま」や年間行事計画、日課表および参与観察によって得られた筆者のフィールドノーツを参考に明らかにする（第Ⅲ章）。第三に、聞き取り調査をもとに保護者および保育者からみた「つばき園」の必要性や重要性を明らかにする（第Ⅳ章）。以上の検討をもとに、離島における幼児保育・教育施設の役割を明らかにする。

Ⅱ. 過疎地域における幼児教育・保育施設の先行研究

「つばき園」がある三島村は、過疎地域自立促進特別措置法の2条1項を適用条文に、総務省（2017）により過疎地域に指定されている。「過疎地域」と一括りにし、幼児教育・保育施設の現状を考えることは難しいが、前述の通り、離島の幼児教育・保育施設の実態を取り上げる研究はまだ手薄なのが現状である。そのため、ここでは、過疎地域における幼児教育・保育施設の先行研究を概観する。

日本保育学会（1971）は、「人口の構造的変動は幼児保育の活動に大きな影響を及ぼす」（p.14）という考えを前提に、人口流動と幼児保育との関係、その実態について明らかにしている。萩原（1971）は当時の社会状況を受け、保護者が有する保育への要求の在り方について「過疎化地域においては、一般に、農林業や出稼ぎなどで母の就労の比率が高いので、保育を4時間に限定される幼稚園よりも、長時間保育の保育所が期待されるのは当然であるし、祖父母のいない核家族では、とくに深刻な問題になっている。幼稚園よりも長時間保育の保育所を普及させ、しかも幼稚園と同レベルの保育内容を要望するのも、親の保育要求の現れということができる」（p.25）としている。しかし、現実には「過疎化地域の幼児人口の減少が保育施設の統廃合の問題を生じ、通園距離の拡大、スクールバス使用の経費負担の困難、経営困難などの問題を起こしている」（p.25）という状況があったことがわかる。

以上のように、人口流動や過疎化を受けて保育へのニーズの変化、小規模保育施設をいかに存続し、現有の施設設備や職員をどこまで維持することができるのかは課題であるとする一方で、吉村（1997）は小規模保育所の保育内容を鑑みた場合、大規模施設よりも優れている点として、「大規模施設のクラス単位の保育よりも、異年齢で過ごす経験も多く、兄弟数の少ない現代では得がたい生活となる」（p.39）点と「生活に根ざした保育内容」（p.39）をその良さとして挙げている。それはつまり、家庭に代わるところとしての側面をもつ保育所は大規模よりも小規模の方がむしろ理想的なのではないか、ということである。また、近代的な設備や大型の遊具などは整えられなく

でも、現在あるものを利用したり、地域の人々と協力し手作りをすることで人間関係も豊かになるであろうという吉村（1997）は提案している。

このように、過疎地域の小規模保育所に対する問題関心は少なからずあり、考察の対象となされてきたことがうかがえる。しかし、先述の通り、宮里（1999）によれば、過疎地域における保育問題はほとんど研究がなされていないのが現状である。このような研究の状況において、農村部における保育所の歴史的展開を踏まえ過疎地域での聞き取り調査を通し、小規模保育の現状を把握した西垣（2007）は、宮里（1999）と同様に「過疎地域で営まれている保育に関する研究はこれまでほとんど為されていない」（p.238）としながらも、櫻井慶一、宮里六郎、郷地二三子の三者を取り上げ、研究の特徴をそれぞれ以下のようにまとめ、「櫻井は過疎地の保育制度、財政を中心に、宮里は保育所の適正規模問題、異年齢保育実践等の実践、支援からの研究を、郷地は各地域での保育実践を質的方法で取り上げ研究を行なっている」（p.252）としている。

しかし、櫻井（1990）や櫻井（2017）、また、向平（2011）の研究であっても過疎地域における小規模保育所にかんする研究は、保育の制度的側面や行財政面への着目を中心になされている。この点は、宮里（1999）も過疎地における保育研究の課題として掲げ、「過疎地の保育実践としてまとめられたものはない」（p.209）とする点である。また、対象とされる地域は、西垣（2007）が京都府 A 市の過疎地域指定区域にある 10 か所の保育所を対象にした研究や、向平（2011）が奈良県十津川村のへき地保育所において保育活動の実態と保育行政の課題を明らかにした研究のように、農村部などが対象とされ、離島における保育の様子をうかがえる研究は数が少ない。

では、過疎地域とりわけ離島の小規模保育所ではどのような保育が行われており、子どもたちはどのように過ごしているのか。以下、三島村硫黄島の子育て広場つばき園を事例にその実態を明らかにする。

Ⅲ. 三島村硫黄島子育て広場「つばき園」の概要

1. 三島村が取り組む子育て支援

三島村には、硫黄島の他に竹島と黒島がある。それぞれに子育て広場が設置されている。黒島「野いちご」は 2006 年に開園、続いて硫黄島「つばき園」が 2014 年 5 月に開園、竹島「グーミーズ」は 2016 年に開園している。ここでは、三島村が毎月発行している「広報みしま」に掲載された記録をもとに、子育て広場の概要や子育て支援を明らかにする。第 1 表は、「広報みしま」をもとに作成した子育て広場の変遷である。

「広報みしま」2015 年 1 月号によると「今年 5 月、硫黄島に開園したつばき園に園庭が設置されました。8 月の園の改装に加え、子どもたちが安全に過ごせる環境が整備されてきました。これからも元気にぎやかな子どもの声が、硫黄島に響き渡ること期待します」（p.7）とある。

第1表 「広報みしま」にみる三島村の子育て広場の変遷

年月	事柄	掲載号
2012年3月	黒島「野いちご園」1名卒園 硫黄島1名卒園	2012年4月号
2012年4月	黒島「野いちご園」在籍6名 竹島5名	2012年6月号
2012年7月	黒島で合同お泊り保育 (年長さんと小学1年生計6名)	2012年9月号
2012年	竹島での出張保育	2012年9月号
2013年3月	黒島「野いちご園」第7期生1名卒園	2013年4月号
2014年5月	硫黄島「つばき園」開園	2015年4月号
2014年8月	硫黄島「つばき園」内の改装	2015年1月号
2014年	硫黄島「つばき園」園庭設置	2015年1月号
2015年3月	硫黄島「つばき園」2名卒園 黒島「野いちご園」2名卒園 竹島1名卒園	2015年4月号
2015年4月	子ども・子育て支援新制度スタート	2015年1月号
2016年	竹島「ゲーミーズ」開園 保育場所：竹島生活センター2階	2016年7月号 2017年4月号
2017年3月	硫黄島「つばき園」4名卒園 黒島「野いちご園」2名卒園 竹島「ゲーミーズ」1名卒園	2017年4月号
2018年1月	大山村長3期目実践対策として「保育料を3年以内に無償化すること」を掲げる	2018年1月号
2018年3月	硫黄島「つばき園」3名卒園 黒島「野いちご園」1名卒園 竹島「ゲーミーズ」2名卒園	2018年4月号
2018年4月	子育て広場の保育料とおやつ代の無償化スタート	2018年5月号
2018年5月	硫黄島「つばき園」に保育士が赴任	2018年6月号

(「広報みしま」をもとに筆者作成)

つばき園は、三島村総合体育館(写真1)の待合室であった場所と事務室であった場所を改装し保育が行われている。三島村総合体育館は、小学生や中学生が体育の授業の際に利用することがある。しかし、写真2のように、登園してから朝の会までの

間の時間など、利用者がいない時間帯は園児たちが体育館を利用して遊ぶことができる。待合室であった場所は、写真3のようにプレイマットが敷き詰められた保育室である。おもちゃやおりがみなどの遊具も保育士や支援員の工夫、また、島の人からの寄付により充実している。事務室であった場所には、写真4のように3歳未満児が遊ぶときやお昼寝をするときに用いられている。2014年にできたとされる園庭は、写真1にある三島村総合体育館の正面玄関の前にある道路を挟んだスペースに柵で周囲を囲うように設置された。

設備だけでなく、子育て支援制度の充実に向けての動きもみられる。2012年8月「子ども・子育て支援法」が成立し、2015年4月から「子ども・子育て支援新制度」の取り組みが行われている。2015年1月号の「広報みしま」では、こうした国の取り組みを踏まえ、「三島村子ども・子育て会議」を開催、「三島村子ども・子育て支援計画」を策定し、三島村の状況を踏まえて、子育て支援の在り方を模索しようとする様子がうかがえる。



写真1 「つばき園」のある三島村総合体育館
(2018年11月21日 筆者撮影)



写真2 三島村総合体育館で遊ぶ様子
(2018年11月21日 筆者撮影)



写真3 保育室での制作の時間の様子
(2018年11月21日 筆者撮影)



写真4 未満児がお昼寝をする部屋
(2018年11月22日 筆者撮影)

また、2018年度から三島村の子育て広場は無償化されている。「広報みしま」2018年5月号には「村では、村内における子育て支援の一環として、平成30年4月から村内子育て広場の保育料などを無償化することになりました。保育にかかる保護者の負担軽減を図り、安心して子どもを産み育てる環境をつくることが目的です。無償化されるのは、保育料とおやつ代です。傷害保険料等の一部の経費はこれまでどおりご負担をお願いします。また、現在でも多くの支援員の方々にご協力をいただいておりますが、保育中の安全確保のため、常勤保育士2名体制を目指しています。お知り合いの方で、村内の子育て広場で働いてみたいという方をぜひご紹介ください」(p.6)とある。鹿児島県三島村役場定住促進課(2017)によれば、無償化される以前、保育料やおやつ代は保護者が負担しており、2017年4月以降、預託料として1時間あたり160円(1世帯2人以上預ける場合は、2人目以降1時間当たり80円)であり、おやつ代は1日あたり一人50円であった。

全国的にも幼児教育・保育無償化の流れがあり、2019年10月から実施される予定である。これは、2017年12月に閣議決定された「新しい経済政策パッケージ」が背景にある。一方で、三島村の子育て広場無償化の背景には、3期目であった大山村長が掲げた「保育料を3年以内に無償化します」というマニフェストがある。

その他、三島村での出張保育が行われた記録があるなど、三島村の子どもたちの交流や子育て広場を充実させるための動きがみられる。その一つとして、竹島「グーミーズ」の保育施設にかんするものがある。「広報みしま」によると、村議会において竹島「グーミーズ」の保育環境にかんする一般質問がたびたび出されている。2018年3月の村議会において「みしま村竹島グーミーズについて設備面で状況的に厳しい環境にあり、園児数の増加による課題も上がっている。将来的に保育園施設の建設は可能であるのか」(「広報みしま」2018年5月号, p.2)という質問が寄せられている。これに対し「活動内容によって体育館や隣接の野外スペースを使用する等の工夫をしている。現時点において保育園施設の建設は考えていない」(「広報みしま」2018年5月号, p.2)との回答をしている。しかし、2018年12月の村議会においては、老朽化している住宅や保育施設の今後の補修・整備計画についての質問に対し「竹島地区の保育施設について、地区内の空き家を改修し、使用できるよう検討している」(「広報みしま」2019年2月号, p.2)と、竹島「グーミーズ」の保育環境を改善することが前向きに検討されていることがわかる。

2. 子育て広場「つばき園」の保育内容

ここでは、子育て広場「つばき園」での参与観察を通して、離島における保育内容の実態を明らかにすることとする。

子育て広場「つばき園」の前身として、子育てサークル「つばき園」がある。後述するが、未就学児をもつ母親が自主的に集まり、読み聞かせの活動や情報交換を行う

という場であった。その後、保育士資格や幼稚園教諭免許、小学校教諭免許をもつ島民が数名で交代しながら「つばき園」での活動を支えていた。その後、2014年5月に子育て広場「つばき園」として、村営の子育て広場が始まるという経緯がある。

2018年11月現在、「つばき園」園児は6名であった。そのうち3名は未満児である。2018年度より子育て広場の無償化が始まったこともあり、嘱託職員として保育士が配置され保育が行われている。また、2～3名の支援員が保育をサポートしている。

第2表は、「つばき園」の2018年度年間行事計画の一覧である。実際には、保育活動の都合から取り組むことができなかった内容もあるが「父の日の制作」では、紙粘土を用いた制作を行ったりなど、年間を通して園児が取り組むことのできる活動が計画されている。「つばきえんだより」によれば、「やわらかい水の感触や、冷たい肌触りは、子ども達の心を開放し、体の動きも活発になります。まず、「水と仲良しになる」のが目標。水中宝探しやおもちゃを使って怖がらずに遊べるよう配慮します。また、未満児さんは小さいプールに入り、手足に水をかけたり、おもちゃを水に浮かべたりなど楽しみながら水に親しみたいと思います。見学の園児は、たらいを使った水遊びや、室内あそびを楽しみます」（「つばきえんだより」6月号、p.1）とあるように、プールや水遊びの活動が、異年齢保育ならではの工夫により行われていることがわかる。また、三島村村民スポーツ・レクリエーション大会や敬老会にも参加し、ダンスなどを披露するなど、地域の人々との交流を深める活動が重視されている。

第2表 2018年度つばき園年間行事計画

月	行事
4月	身体測定、こいのぼり制作、ランチクッキング
5月	身体測定、母の日制作、紙粘土
6月	身体測定、父の日制作、時計の日制作
7月	身体測定、七夕制作、お泊り保育
8月	希望により登園（応相談）
9月	身体測定、敬老会、お団子作り
10月	身体測定、ハロウィン、ランチクッキング
11月	身体測定、お誕生会、文化祭
12月	身体測定、お誕生会
1月	身体測定、風揚げ、お誕生会
2月	身体測定、節分・豆まき、バレンタインクッキング
3月	身体測定、ひなまつり、ランチクッキング

（2018年度つばき園年間行事予定表をもとに筆者作成）

第3表 「つばき園」の日課表

時間	活動内容
8:00~9:30	○開園（随時登園） ○朝の準備 お帳面にシールを貼ったり，検温・タオルかけ等かばんの中身を出し，身の回りの支度をします
9:40	◎自由遊び ブロック・おもちゃなど好きな遊びを楽しみます ○片付け・排泄・手洗い
9:50	◎朝の会 *朝の歌を歌ったり，出席の確認，季節の歌を歌ったりします *お当番活動も交代で行います
10:00	◎おやつ 皆で一緒にいただきます。 *牛乳とお菓子（日替り）を食べます *食後にお口拭きを使用します ○お皿やコップを片付ける，ランチョンマットを拭く
10:15	◎設定保育 *保育士が設定した活動を行います（普段は縦割り保育ですが，内容によっては未満児と3歳以上で別の保育になることもあります） ○片付け・（汗をかいたり，汚れたら）着替え・排泄・手洗い
11:30	◎お弁当 毎日愛情弁当を皆で一緒にいただきます *食後にお口拭きを使用します ○歯磨き・パジャマにお着替え
12:40	○絵本などの読み聞かせ *ゆったりとした気持ちで入眠できるようにします ◎午睡（年長さんは1学期のみ午睡があります） *年齢に合わせて午睡の時間を調整します
14:15	○起床 *着替え・検温・排泄・手洗い・うがい
14:30	◎おやつ *牛乳・お菓子・果物などを食べます *食後にお口拭きを使用します ○お皿やコップを片付ける，ランチョンマットを拭く ○帰りの準備をする
14:45	◎帰りの会 *帰りの歌を歌ったり，帰りの挨拶をする
15:00	◎降園（随時降園） *延長保育の園児はお迎えまで自由遊びとなります
17:00	○閉園（17時以降のお預かりが必要な場合はご相談に応じます）

（2019年度つばき園デイリープログラムより筆者作成）

「つばき園」での1日は、第3表の日課表がもととなり保育が行われている。ここでは、筆者が参与観察を行った2018年11月21日（水）と11月22日（木）の記録をまとめた第4表をもとに、「つばき園」での保育の様子を明らかにする。

園児の保護者により、それぞれ状況が異なる。そのため、登園や降園の時間は園児により異なり、登園は8時から9時30分の間に行われ、9時30分以降に朝の会を行うという流れである。登園してきた園児は、まず、自分の鞆を棚に入れたり、お手拭きタオルを用意したり、身支度を整える。その後、自らが遊びたい場所で行いたいことを行う。21日は全員が体育館に集まっていたが、それぞれにボールプールに入ったり、フラフープをしたり、かけっこをしたりしていた（写真2）。

第4表 調査期間中の「つばき園」での幼児教育・保育の概要

	11月21日（水）		11月22日（木）
8:00～	随時登園 体育館でボール遊び、フラフープ、かけっこ（写真2）	8:00～	随時登園 各自、かるた遊び、おりがみ、体育館でかけっこ
9:38～	朝の会	9:40～	朝の会
9:55～	おやつ	10:00～	おやつ
10:05～	制作の時間 松ぼっくりを使ったクリスマスリース作り（写真3）	10:15～	ランチクッキングの時間 3歳未満児は別室で遊ぶ 3歳以上児はクッキング（写真4・5）
11:30～	お弁当の時間、歯磨き	11:30～	ランチクッキングで作ったサンドイッチをみんなで食べる
12:15～	3歳未満児お昼寝	12:30～	3歳未満児お昼寝
	3歳以上児は一人ひとり、保育士とともに時間の過ごし方を決める（写真6） 12:40までドリル 13:00までおままごと 14:30まで牧場（写真7）		A児、13:05までドリル B児、13:05までおえかき（写真8） 13:25～A・B児おままごと
14:45～	おやつ	14:30～	おやつ
15:00～	帰りの会	14:45～	帰りの会
～17:00	随時降園	～17:00	随時降園

（聞き取りにより筆者作成）

朝の会では、その日の当番さんの号令により挨拶を行い、歌を歌ったり、その日の予定を確認するなどした。21日は、制作の時間が設けられており、以前拾ってきた松ぼっくりを利用してクリスマスリースの制作が行われた(写真3)。異年齢保育が行われているため、それぞれの発達段階に応じて制作に取り組めるよう、保育士や支援員は一人ひとりの園児に寄り添いながら制作の手助けを行っていた。また、22日に行われたランチクッキングは包丁を用いたりすることから、3歳未満児と3歳以上児とを分け、3歳以上児2人に対し1名の保育士が付き添いながらサンドイッチを作成した(写真5)。3歳未満児は、お昼寝の部屋で支援員とともに遊ぶ時間となった。

その後、お昼ご飯を食べ、午後の時間になると3歳未満児と3歳以上児で活動を分けて過ごす。写真4の部屋で、3歳未満児はお昼寝を行う。3歳以上児は、写真6のように一人ひとりがどのように過ごすのかを保育士と相談して決める。21日は支援員の牧場に行ったり(写真7)、22日には文字や数のドリルを使いながら練習を行っていた(写真8)。その後、皆でおやつを食べ、順次降園となる。



写真5 ランチクッキングの時間の様子
(2018年11月22日 筆者撮影)



写真6 保育士とともに時間を決める様子
(2018年11月21日 筆者撮影)

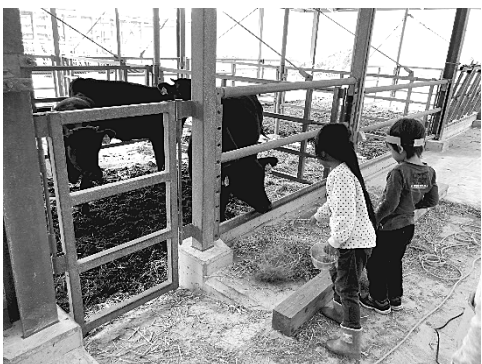


写真7 牛に餌をあげる園児の様子
(2018年11月21日 筆者撮影)



写真8 お絵描きやドリルをする園児
(2018年11月22日 筆者撮影)

IV. 保護者および保育者が語る「つばき園」での幼児教育・保育

ここまで、子育て広場「つばき園」での園児の様子を参与観察によって明らかにしてきた。以上を踏まえ、離島における幼児教育・保育施設の役割を明らかにする手がかりとして、「つばき園」の前身である子育てサークル「つばき園」の参加者であった島民、「つばき園」に子どもを通わせている保護者および「つばき園」の保育者への聞き取り調査を行った。聞き取り調査は2018年11月21日（水）と22日（木）にそれぞれの対象者に合わせた時間帯に行った。一人あたりの調査時間は10～30分である。聞き取り調査を行った調査対象者は第5表の通りである。

調査対象者の属性に応じて、以下の質問項目を設け、半構造化インタビューを行った。まず、「つばき園」の前身である子育てサークルの参加者へは、①なぜ、子育てサークルを行う必要があったのか。どのようなことを行っていたのか。②離島における子育てのメリット・デメリットについて。次に、「つばき園」に子どもを通わせている保護者へは、①子育てにおける「つばき園」の必要性、②離島における子育てのメリット・デメリットについて。そして、「つばき園」の保育者へは、①離島の幼児教育・保育ならではの難しさと工夫について、でそれぞれ聞き取り調査を行った。以上、4種類の質問項目に対する語りを分析することを通して、離島における幼児教育・保育施設の役割を明らかにする。

第5表 調査対象者一覧

	属性	居住歴	備考
保護者 A	子育てサークル	35 年	専業主婦
保護者 B	子育てサークル	19 年	専業主婦
保護者 C	つばき園	5 年	仕事あり
保護者 D	つばき園	4 年	仕事あり
保育者 E	嘱託職員，保育士	半年	保育士資格あり
保育者 F	保育支援員	4 年	幼稚園，小学校教諭免許あり
保育者 G	保育支援員	3 年	免許等なし，子育て経験あり

（聞き取り調査をもとに筆者作成）

1. 子育てサークル「つばき園」の経緯と内実

子育てサークル「つばき園」については、保護者 A がまず発足した当時の様子を以下のように語っている。

保護者 A：私は基本専業主婦なので、子どもを置いて仕事をしないといけないというのはまったくないので。けど、やっぱり子どもの成長を考えるうえで、やっぱり

一番最初の単位というのは家族だけれども、そのあとがすっぽり抜けての学校じゃないですか。こういうところだから、小さいときからお兄さん、お姉さんって育っているから改めて小学校にほんっと入っても、そんなによそほどは抵抗はないんですよ。だけれども、だけれども、そのやっぱり学校に入る前の集団行動の基礎的なもの。だから、先生がいらしてというのが理想ではあるけれども、じゃあないからと言って、そのままにしておくのはねって。

保護者Aが子育てを行っていたころは、未就学児が何人かいたため、母親同士での交流は不定期ではあるがあつたという。しかし、子育てサークルという形で定期的に時間を決めて集まるようになった理由には、「子どもの成長を考えるうえで」とあるように、就学前の他者とのかかわりが必要であると判断したことが背景にあることがわかる。では、どのようなことが行われていたのか。保護者Aの語りに加え、保護者Bの語りからもその内実を明らかにする。

保護者A：とりあえずは時間を決めて、みんなで集まろう、と。じゃあ、そこでなにをやるか。まあ、手っ取り早くやれると言ったら読み聞かせとか、歌を歌うぐらい。けど、確実に集合できる場所ってのがなかったんで、センターのお部屋をお借りして。

筆者：センターだったんですね。

保護者A：そうそう、和室があつたから。広いじゃないですか。だから、少々ね。だから、遊ばせるっていう感覚ですね。

保護者B：私が子育てをちょろどしているときに、ある奥さんが保育士さんだったのでお歌を歌ったりだとか、お遊戯を教えてくださいだとかっていうのはしてました。学校の運動会とか敬老会とか文化祭で発表できるようには参加させてもらってて。それに向けてのお遊戯の練習だったり。けど、基本は遊び。遊ばせてって感じです。

保護者Aと保護者Bは子育てサークルに所属していた時期が異なるため、二人の語りからはその時々に参加することができた参加者によって、行っていた活動の違いを見ることができる。子育てサークルが始まったばかりのころに参加していた保護者Aは、各々が読み聞かせや歌を歌っているのに対し、保護者Bのころには、保育士資格を持った参加者がいたことにより、学校の運動会などへの参加が行われていたことがわかる。また、このころは仕事をもっている母親がいなかったこともあり、専業主婦同士集まることができたという（保護者B）。以上の点からは、保護者は就学前の教育・保育施設がない中も、その必要性を感じ自主的に集まり活動を行っていたことがわかる。

2. 離島における子育てのメリット・デメリット

次に、離島における子育てのメリット・デメリットである。島での子育て経験があ

る保育者Gは、離島での子育ての良さと心配な点を以下のように語る。

保育者G：いいところは自由に遊べる。ただ公園がないんですけれどね。公園はほしいと思うけれど。結構自由に、どこの子ってわかるじゃないですか。で、5時にはみんなチャイムと一緒に帰ってくるし。お風呂で裸の付き合いも子どもたちができるし。悪いところと言ったら、子どもたちの人数がやっぱり少ないから。私が心配したのは高校に行って、大人数の中で生活がどういう風にな変わっていくんだろうかってというのは嫁と話したことがありますね。ちょっと心配ですねって。みんなね、島の子たちはそれでやってきているからどうなのかなーと思って。

保護者Cは硫黄島で仕事を有している母親である。保護者Cはもともと島での子育てに興味があり、自分自身も島で働くことに興味があったために移住してきたという。

保護者C：やっぱり大自然の中で遊びのびと子供が育ってほしいっていう気持ちが一番だったので。勉強も大事だけれども、いろんな台風とかも結構ひどかったりするんですけど。そういう中で生きる。生きる術をちょっと、小さいうちに学んでほしいなとか。自然の中で遊ぶ方法っていうのを自分たちで見つけて。テレビとかゲームとかじゃなくて。そういう自然の中でどうやったら楽しく遊べるかっていうのを自分たちの体験を持って。

保護者Cの語りからは、硫黄島の豊かな自然の中で子どもが成長していける環境にメリットを感じていることがわかる。一方で、在宅での仕事を有している保護者Dは、島での子育て大変な点として以下を挙げている。

保護者D：不便ですかね。いろいろ遊び場とかたくさんあるから。ここはあんまりない。だから、このつばき園ができて助かります。

保護者Dは、不便であること、また遊び場が少ないことを理由に離島での子育ての大変さを語っている。また、この語りからは、そうした遊び場の少なさを補う点において幼児教育・保育施設が有効に機能していることがわかる。

3. 子育てにおける「つばき園」の必要性

では、子どもを預けている保護者は「つばき園」の必要性をどのように語るのか。

保護者C：島って、基本男性がメインで働いて、女性は家でっていう。昔の昭和の初期のそんな感じのスタイルが当たり前だったんですけども。私とか。だんだん定住の人たちが女性も働きたいっていう人がこの何年間で増えて。それだとどうしてもつばき園がないと皆さん生活ができないっていう。

保護者D：仕事ができるっていうこと。いろんな家事もできるし、畑も手伝えるし。自分たちの。

保護者Cが硫黄島に移住してきた当初は、「絶対に預けないといけないう人はいなかった」という。しかし、保護者Cや保護者Dが語るように、働く場の変化や働

きたいと思う女性が増えたことにより、幼児教育・保育施設の必要性も高まり、「つばき園」がないと働くことができないと感じていることがわかる。

4. 離島の幼児教育・保育ならではの難しさと工夫

保育者Fは幼児が就学前に学ぶ施設が「つばき園」しかないことから、小学校の教員と打ち合わせをし、写真8にみられたようなドリルなどの取り組みを始めたという。しかし、園児たちが新しいドリルを欲したとしてもすぐに対応できないことをもどかしい点として挙げていた。

保育者F：いろんな子を預かるんですけど、字とかが苦手な子とかがいて。とりあえず、1年生になる前に自分の名前を読める、書けるぐらいはしといたほうがいいみたいですよってというのは、学校の先生とちょっと打ち合わせをして。全部は書けなくてもいいけど、自分の名前ぐらいは、とか。あと、お友達の名前が読めた方がいいとか。で、年長さんだけ集めてやったり、全員でその子のレベルに合わせてやったり。

また、2018年度より嘱託職員として「つばき園」の運営を行っている保育者Eは、大規模保育所でも働いた経験があることから、「つばき園」との違いを次のように語る。

保育者E：違うところは全部しないといけない。前は何人かいるからチームワークみたいな感じで。お掃除には交代でとか。早番遅番の時とか。

吉村（1997）も述べる通り、小規模保育所では保育士などの職員をいかに維持するかが課題となっていることからわかる通り、保育者Eが語るように離島での幼児教育・保育施設では一人ひとりの保育士の役割を分担できない点に難しさがあるようである。しかし、以下の語りからもわかるように、保育の面においては保育者と保護者に明確な線引きがあるのではなく、お互いに連携を取り合いながら園児の育ちが支えられている様子がわかる。

保育者E：子育て広場っていう名前になっているから、ちょっと保育士だけでは見切れないなっておもったら、お母さんに何ヶ月か一緒に見てほしいって言ったらそういう風に父兄ということで壁ができるのではなく通じ合って。私もその子の保育をしたいし、お母さんはお母さんとしてここで働きながら、ほかのことにも目を配りながら。そういう連携しながら。園として保育者と保護者の間で線を引くのではなく、その線が曖昧というか一緒に育てていくっていいところがいいのかなと思いますね。

以上、4つの質問項目に対する語りから、次の3点が指摘できる。①離島における女性の働き方の変化から幼児教育・保育施設の必要性が生じたこと、②離島に1つしかない保育施設だからこそ、就学前の準備教育を担っていること、③保護者が保育園の中に入って、保育者とともに育児をする環境があること、である。

V. おわり

本稿の目的は、保護者および保育者への聞き取り調査を通して、離島における幼児教育・保育施設の役割を明らかにすることであった。「つばき園」での参与観察および聞き取り調査を通して、次の3つの役割を提示することにつながった。①離島における女性の働き方の変化に対応した幼児の教育・保育を担う役割、②離島に1つしかない保育施設だからこそ担う、就学前の準備教育施設としての役割、③保護者が保育園の中に入って保育者とともに育児を行えるなど、それぞれの園児や保護者の幼児教育・保育の進捗に対応する環境を提供する場としての役割、である。

本稿が明らかにしたように、離島における幼児教育・保育施設の役割は、保護者がよりよく働ける環境を支える側面だけでなく、なによりも子どもの発達にとって欠かすことのできない新たな他者とのかかわり方やつながりを生む場所であると言える。しかし、やはり過疎地域における小規模保育所は、人口減少社会の中でいかに存続していくのが課題であると指摘される(吉村, 1997)。子どもの保育を受ける権利や学ぶ権利を奪わないためにも、過疎地域および離島の幼児教育・保育にかんする研究が必要であると言える。

そこで最後に、今後の研究への展開として「子育ての社会化」という観点から都市部の幼児教育・保育施設との比較の可能性を示唆したい。「子育ての社会化」とは、「子育てに社会全体で取り組む」という概念で語られるが、現状としては「子育て支援が市場原理に基づくサービスとして消費され」(p. 83)、子どもの育ちという視点が軽視されているのではないかと山本(2016)は指摘する。今後、都市部とは人口動態も就業形態も異なる過疎地域や離島における幼児教育・保育を「子育ての社会化」という視点から分析することは、新たな視点を提供するうえで有効であると考えられる。

また本稿においては、幼児教育・保育施設に対する語りの主体を保護者および保育者に限定して調査を行った。今回の調査においての協力者は、保護者と保育者ともに女性だけであったが、女性だけが幼児教育・保育の当事者でないことは明らかである。今後は、男性を対象とした聞き取り調査も視野に入れることや、園児が保育園での学びや思い出をどのように語るのかについても検討が必要である。今後の課題とする。

謝辞

本研究では、三島村教育委員会の皆様をはじめ、三島村硫黄島子育て広場「つばき園」の園児の皆様、保護者の皆様、そして、「つばき園」の先生方に大変お世話になりました。保育の現場に参加させていただき、たくさんのことを教えてもらいました。この経験をこれからの研究にもつなげたいと考えています。また、子育てサークル「つばき園」の参加者であった島民の方々には、突然のお願いながら貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。心より御礼申し上げます。

文献

鹿児島県三島村：暮らしの情報 広報みしま.

<http://mishimamura.com/livinginfo/505/>(最終閲覧日：2019年8月5日)

鹿児島県三島村役場 定住促進課 (2017)：きらりと光るアイランド『みしまぐらし』
三島村移住定住ガイドブック. <http://mishimamura.com/mishimagurashi/> (最終
閲覧日：2019年8月5日)

黒田真穂・山口行一・岩崎義一 (2015)：就労と子育ての両立からみた幼児教育・保育
施設に関する分析. 日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集, **13**, pp. 89-
92.

桜井慶一 (1990)：過疎地域における保育所の現況とその制度の在り方に関する一考
察. 社会福祉学, **31**(2), pp.1-25.

櫻井慶一 (2017)：過疎地域の保育所の動向と課題に関する一考察. 生活科学研究,
(39), pp.1-10.

鈴木乙史・依田明・繁多進・清水弘司・宮前理 (1978)：奄美大島名瀬市における幼児
教育の実態－Ⅱ. 奄美と横浜との比較. 日本教育心理学会第 20 回総会発表論文
集, pp.52-53.

総務省 (2017)：過疎地域市町村等一覧 (平成 29 年 4 月 1 日現在).

http://www.soumu.go.jp/main_content/000491490.pdf(最終閲覧日：2019年8
月5日)

得居千照 (2018)：離島の幼児教育における保小連携プログラムの実態－新潟県粟島の
保育園と小学校生活科が取り組む自然体験活動を事例に－. 地域と教育, (17),
pp.23-37.

西垣美穂子 (2007)：農村部における保育所実態の一考察－A市におけるヒヤリング調
査から－. 佛教大学大学院紀要, (35), pp.237-253.

萩原元昭 (1971)：人口流動と幼児保育. 日本保育学会『人口流動と幼児保育－過疎化・
過密化地域における実態－』, フレーベル館, pp.14-39.

宮里六郎 (1999)：過疎地における保育の実態と研究の課題. 日本保育学会第 52 回大
会研究論文集, pp.208-209.

宮前理・依田明・繁多進・鈴木乙史・清水弘司 (1978)：奄美大島名瀬市における幼児
教育の実態－Ⅰ. 名瀬市の場合 母親・教師間の比較. 日本教育心理学会第 20 回
総会発表論文集, pp.50-51.

向平知絵 (2011)：過疎地域における保育の実態と課題－奈良県十津川村のへき地保育
所を事例に－. 現代社会研究科論集, (5), pp.77-94.

山本由紀子 (2016)：「子育ての社会化」と子どもの育ち. 大成学院大学紀陽, **18**, pp.83-
88.

吉村真理子（1997）：小規模保育の問題．日本保育学会『わが国における保育の課題と展望』，世界文化社，pp.34-40．